

2022年から海外自転車旅を続けている白糠町出身の酒井空知さんが、自転車の世界を走るようになった背景には「外の世界を自分の目で見てみたい」という素朴な動機がありました。

白糠で育ち、身近な風景の中で過ごしてきたからこそ「一度、町の外に出てみたい」「知らない場所を見てみたい」という思いが自然に芽生え、自転車はそのための手段でした。時間をかけて移動し、土地の空気を感じ、人と出会う。その積み重ねが、いつしか海外を走ることにつながったと酒井さんは話します。

そんな酒井さんが世界で最も過酷と言われる自転車レース「シルクロードマウンテンレース」に挑戦し、日本人で初めての完走者となりました。

——まずは、今回完走された「シルクロードマウンテンレース」について、どんなレースなのか教えてください。

一言で言うと、自転車にも人にもとにかくダメージが大きい過酷なレースです。未舗装路や自転車を担いで進まなければならない区間も多く、自転車に乗る人でも「それは何

チャリダー／SORACHI SAKAI

海外自転車旅

シルクロード
マウンテンレース編

だ？」と驚くような内容です。そういったものを総称して「マウンテンレース」と呼んでいます。

中央アジアのキルギスで開催される「シルクロードマウンテンレース」は、そのマウンテンレースの中でもかなり早い時期に始まった大会で、今年で7回目になります。世界的に見ても、このジャンル自体がまだ10年ほどの歴史しかない、新しいレースです。

——酒井さんは、もともと自転車がとても好きだったと聞いています。自転車旅から、なぜレースに挑戦するようになったのでしょうか。

自転車旅自体は、今も同時並行で続けています。もともと自転車で国内外を旅するのが好きで、世界を回



▲キルギスの遊牧民のユルト（移動式の円形テント）。モンゴルのゲルとは構造的に違う部分もある



ソンクル湖と遊牧民▶
(2024年大会)



◀雄大な天山山脈を望む
旧ソ連製のバスがこの地域の歴史を語る

っていました。その中で、キルギスを訪れたときに、偶然シルクロードマウンテンレースの存在を知ったのです。

調べてみると、国際的にはとても有名なレースなのに、日本人の挑戦者が過去に誰もいないことが分かりました。そのことにも、すごくワクワクしたのです。「次にキルギスへ行ったときは、このレースを走ろう」と思いました。

——過酷なレースへの挑戦に不安はありませんでしたか。

不安はもちろんありました。ただ、これまで自転車旅を通して海外を走ってきた経験があったので「何が起きるか分らない」という状況自体には、ある程度慣れていたと思います。それよりも、「まだ誰もやっていないことをやるかもしれない」という期待のほうが大きかったです。

——レースの規模や距離について、もう少し詳しく教えてください。

今年のキルギスのコースは、距離が約1954kmで、獲得標高はおよそ3万メートルでした。日によって1日で200キロ近く走り、4千メートル以上登ることもあります。

そらち
酒井空知さん

●2002年白糠町生まれ。白糠中学校時代は陸上少年団に所属。札幌の高校を卒業後、東京の大学へ進学するも4カ月で退学。2022年、夢だった海外自転車旅に出発し、翌年から国内外の自転車ウルトラレースにも参戦している。酒井さんのInstagramは下の二次元コードから▶



@S_R_C715

キルギスは国土の半分ほどが標高3千メートル以上にあります。富士山と同じくらいの高さでも、特別な山頂というわけではなく、当たり前のように、ただの「道」が続いている感覚です。その標高を何日もかけて走り続けます。

——体への負担も相当なものです。

そうですね。体力的なきつきもありますが、自転車自体へのダメージも非常に大きいです。実際私も初参加の昨年の大会では自転車のフレームが折れてしまい、リタイヤを余儀なくされました。セルフサポートが原則なので、トラブルが起きてても基本的には自分で対処しなければなりません。

——完走率もかなり低いと聞きました。

完走率はその年にもよりますが、例年3割から5割です。今年は過去最多となる41カ国から270人が参加し、完走者は128人と半数を割りました。今年のコースは今までで一番過酷だとも言われていて、それが数字にも表れていると思います。

